相模経済新聞　2023年3月10日号

宇宙生命哲学

ことはじめ

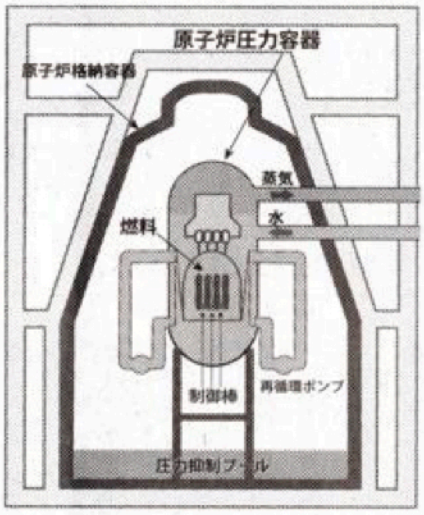
54

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

原子力規制委員会は科学的見識の元に機能すべし

ハト派と言われていた岸田文雄首相は、権力を手に入れた途端にタカ派に豹変し、軍備増強、原発回帰へと大きく舵を切った。その理由は明確ではない。

東日本大震災から早くも12年が過ぎようとしている。あの震災で併発して起こった福島第一原子力発電所の事故では、津波による電源喪失で冷却水の供給ができなくなり、原子炉内の核分裂を起こす反応システムの制御が効かなくなって3つの原子炉で次々と水素爆発が起きた。事故現場で指揮をとっていた吉田昌郎所長が、東電本社との緊迫したやりとりの中で「水蒸気爆発！」と叫んだ場面が忘れられない。もし、あの時、水蒸気爆発を起こしていたら、東京都を含む関東地方一帯が壊滅的な被害を受けていただろう。日本は、歴史上初めて国家存亡の危機に瀕していた。原子炉のような熱源が反応容器の中に封じ込められている場合には、その制御システムは、複雑に入り組んでおり、年月が進むと老朽化して機能しなくなる。特に、核分裂反応が原子炉に与える影響については、長期にわたって使用が可能かどうか、未知の部分が大きい。福島第一原発事故を契機に、経済産業省傘下の原子力安全・保安院が廃止され、環境省外局の三条委員会として原子力規制委員会が設置されて、〝規制と推進の馴れ合い〟からの脱却を目指してきた。しかし、本年2月13日、同委員会は原子力発電所の老朽化対策の新制度として、運転期間を実質的に延長する政府の方針を5名中1名の委員の反対があったにもかかわらず、多数決で受け入れてしまった。今後、原発の運転期間に関しては、原子炉等規制法から経産省が所管する法令に移される見通しだという。



沸騰水型原子炉の模式図（一部）

さらに、核分裂反応で生じる放射性核廃棄物（核のゴミ）は、地球上で行く場所がない。おそらく、現在、原発が設置または誘致されている場所に、永久に保存されることになるだろう。その保存期間は、10年、100年どころか10万年という想像を絶する単位になる。今、原発を使ってぬくぬく生活している私たちは、いずれ数十年のうちに死んでしまう。この負債を引き継ぐのは、何も知らない未来の子供達である。こんな理不尽が許されて良いのだろうか？　原発は絶対悪であるといえ、12年の歳月の経験を振り出しに戻す様な愚を犯してはならない。原子力規制委員会は、科学的見識を持って、廃炉への道筋を示すべきである。